



「クロッキー」

美術室のドアはいつもだらしなく開放されていて、
出入りする人の気配を感じさせる役割をもたない。

だから。

手元に集中していた僕の視界がかげり、
真面目ですね、と声をかけられるまで、入って来たことに気がつかなかった。
顔を上げる。

ひとつ後輩の佐々木がいつもの飄々とした調子で机に軽く腰掛けた。

「なんだよ、」

「いつ来てもいますね」

「真面目なんだよ、俺」

「先輩、芸大受けるってまじですか？」

「……まあ」

「まじなんだ」

「どけよ、そこ。影になる」

面相筆を筆洗に投げ込んでから、佐々木の腹を押しつける。

そのままズルズルと机を降りて、

今度は少し離れたところから作品を見下ろしてくる。

教室の時計を見た。あと1時間で着彩を終えなければならない。

麻布の上に琺瑯のコーヒーポット、レモン2個と、乾燥とうもろこし、ワインボトル。

もう、このレモンを、ワインのラベルを、何度描いたか分からない。

繰り返し、繰り返し、デッサンしては、光と影を追って着彩する。

モチーフは変わっても、毎日。

場合によっては二日、または三日に渡って。

部費の中から提供されたレモンは、完熟を通り過ぎて、
むせるような甘い香りを漂わせていた。
変色して腐敗するまでモチーフとして使うのは毎年のことで...

筆を水に泳がせ絵の具を洗い、
濡いた布で拭ってもう一度、ワインボトルの底に目を凝らす。
紫と、焦げ茶。深い緑。それから...ハイライトの白。
なかなか輪郭が浮かび上がらない。
ガラスの硬さが生まれぬ。

「上手いですね」

「上手くないよ」

「またまた」

「俺みたいなの、掃いて捨てるほどいるから」

会話すれば当たり前に集中が途切れた。
それも僕の欠点だった。
ちょっとしたことで、掴みかけていた感覚を取りこぼす。

「僕うるさいですか？」

「.....うるさいよ」

「黙ります」

「うん」

「...帰った方がいいですか？」

「黙るって言ったよね、いま」

最初の40分で調子が良くないことは分かっていた。
デッサンで形が掴めなかったものが、着彩で表現できるとも思えない。
たぶん今日はダメだ。
こんな調子の日が、受験当日に当たったらと思うとぞっとする。
筆を置いて、眼鏡を外した。
ここ数ヶ月で急激に視力が落ちた。
北向きの薄暗い美術室で自然光を頼りに描き続けているせいだ。
あきらめて切り上げることにした。
いくら描いてもダメな日はダメだ。
集中力にムラがある。それがそのまま僕の今の実力だ。

「先輩、これ誰ですか？」

通学鞆と一緒に放っておいたクロッキー帳を佐々木が広げていた。

「勝手に見るなよ」

「まあまあ」

「まあまあ、じゃねえよ」

「上手いですね」

「だから上手くないから」

取り返そうとしたら、ひょいと掲げられた。

彼は僕よりも背が高く、腕も長いから、

大人が子供にするみたいになってむかついた。

「これ、誰なんですか？何度も描いてる」

人物のクロッキーは僕がもっとも苦手とする分野で、

受験内容とは関係ないが、顧問の指導でこまめに練習するようと言われていた。

動く物の瞬間を捉えることは全ての表現に有効だし、

過去問題のモチーフにカゴに入った鳩が出たこともあるのを知っている。

鳩よりは人間の方が身近だ。

なぜならば、僕の周りには人間だらけだから。

「誰って...、陸上部の」

「幅跳びですか？」

「うん」

「なんていう人？」

「...なんでそんなこと聞くわけ？」

佐々木はいつも僕にからむように話す。

意味も意図は分からない。

面倒くさい奴だけど、悪い奴ではない。

だから放っておく。

放っておけば、そのうち僕にからむのに飽きて、

いつのまにか気がつかないうちに帰って行く。

彼が入部してきてから今までずっとそんな感じだった。

ぱたり。

開いたままのクロッキー帳を机に置いた。

佐々木は制服のポケットに両手をつっこんだまま、

それを見下ろしている。

廊下から吹き抜ける風が開け放ったドアからここまで届いて、

彼の黒く素直な前髪が踊り、まぶたを覆った。

誰なんだろう。

1ページに3、4ポーズのクロッキーが続く。

何ページも何ページも続く。

秋川の目を通して描かれたその人物は躍動感に溢れ、力強く、美しかった。

細身の上半身にしなやかな筋肉。

地面を踏み込む力強さと、空にときはなたれ、飛翔するような軽やかさ。

大まかに動きを把握するだけの線で構成されている。

それがクロッキーの特性だというのは分かる。

だけどそれにしても、極端に人物の顔、表情の表現は疎かだった。

つとめて描かない様にしているのかもしれない。

ギリギリ不自然ではないが、...いや、不自然だった。

なぜ。

どうして。

実際に見てみたいと思わせる。

どんな風に跳ぶのかを。

だから。

これは、とてもいい線だと思う。

だけど。

だから。

息が詰まりそうになる。

彼がどうやってこの線を生み出したのか。

何を思って...、何かを思って...、

知りたいようで知りたくない。

だけど。

これは、とてもいい線だと思う。

だから。

上手いですね、そう言ったのに、頑なに受け入れようとはしない。

彼はいつも。

だから... だから...

僕はほぼ毎日ここを訪れ、

彼の作品を上から眺め、上手いですね、を繰り返す。

胸像のマルスとミケランジェロを背に、

ひとり薄暗い教室で静物を見つめ、

その光と影を紙に写し取る彼に、上手いですね、と声を掛け続ける。

上手いですね、

上手くないよ、

それだけでいい。

その一言だけでいい。

それが僕がこの教室に来る意味だった。

自分の制作など、どうでも良かった。

油絵の具とテレピン油とレモンの匂い。
用紙に付着した炭素、折れた木炭からおう、この教室の空気の重さ。

クロッキーを見たのは初めてだった。
彼が苦辛してそれを克服しようとしているのは知っている。
課題に行き詰まり、このクロッキー帳を脇に挟み、
6BとBの鉛筆だけ持って、ふらりと出掛けて行くのも知っている。
だけど、さすがにその後どこで何をどう描いているかまでは知らなかった。
そこまで追い駆けたら、さすがにうるさがれる。
ただでさえ、会う度にうるさい、と言われているのだ。

それで。
これ以上質問することは許されるのだろうか。
誰なんですか、ともう一度問うことは許されるのだろうか。

「...誰なんですか、この人」

パレットを閉じて、筆洗にすべての筆をつっこんで席を立った。
もう終わるつもりなのだろう、流しに汚れた水を零し筆を洗う。

「幅跳びやってる。俺の幼なじみ」
「.....先輩の、」
「そう。全然才能ないんだけど、俺と同じでクソ真面目」
「練習バカですか？」
「そう。練習バカ。練習バカとデッサンバカ。才能はない」

はははは、と自分で笑うけれど少しも面白がってないのは明かで。
筆の水を切り、渴いた布でくるんで、ため息をついた。

「本当はテニス部の女子でも描きたいところだけど。さすがにそれはちょっとアレだろ」
「さすがにちょっとアレですね」

ノーブルで知的でいかにも文化系の静かな印象の秋川でも、
後輩の女子に美術室の王子様ともてはやされているような秋川でも、
テニスコートで鉛筆を構えスケールを計り始めたら、
さすがにちょっとした変態と言われかねない。

「あいつ短距離のタイムが伸びなくて、転向して。
それで幅跳びやってるんだけど。
最近やっとフォームが整ってきたみたいで調子がいいんだ。
調子がいいから機嫌も良くて、気にせず描かせてくれる。それで」

「そうなんですか」
「そうなんですよ」

躍動する薄い筋肉。
宙をかく手のひら、長い指、風の形に流れる髪。

「そんなこと聞いてどうすんの？」
「...べつに。好奇心です」
「あ、そう」
「はい」

彼の幼なじみ。陸上部の幅跳び。短距離からの転向。才能はない。
すべて僕の知らない真新しい情報だった。

「秋川先輩、」
「なに、」
「もう終わりですか？」
「終わり。帰る」

私物と備品を慣れた手つきで仕分けて、ぽんぽんとしまっていく。
クリアできなかった課題のモチーフには布をかけておく。
座った椅子、鉛筆を並べるのに使った椅子を元の位置に戻す。
美術部と記されたぞうきんで机を拭く。

使った机に何も残さない。
水滴ひとつ、彼の気配は残らない。

「あ。おまえ、水貼りやっつけよ。顧問が言った」
「わかってます」
「クソ機嫌悪かったぞ。2年は誰もやってない、って」
「先輩こそ、短冊書いてくれました？」
「.....あ」
「僕が取り付けるので、いま書いてください」

生徒会の七タイイベントの一環で、
各部ごと笹をデコレーションすることになっている。
美術部は毎年それなりにアート性の高いものを目指して制作しているのだが、
最後の仕上げの、部員それぞれの短冊がまだ集まっていない。
短冊くらいベタなのが返っていいだろう、という意見で、
メタルカラーで塗り潰した笹に黒いケント紙の短冊をつけることになった。

「佐々木は書いたの？」
「僕もいま書きます」
「ホワイトある？」
「あります。先に使ってください」

かちかちかとペンタイプのポスターカラーを振って、
彼に手渡す。

「えー、でも何書こう」
「願い事ですよ。なんでもいいです」
「なにも浮かばない」
「”芸大合格！”でいいじゃないですか」
「それ絵馬だろ」
「じゃあ”芸大に合格しますように”」
「するわけないからな、合格」
「弱気ですね」
「レベルにあった願いにするわ」

クロッキーがうまくなりますように

「...真面目」
「真面目なんだよ、俺」

クロッキーか...
あんな話振らなきゃ良かった。
一番に思いつく願いなのか。
どういふつもりだ。無意識なのか。

「はい、おまえの番」

僕にペンを投げて寄越す。
投げて寄越したらもう、
制服のジャケットに腕を通して、眼鏡を掛けて、早々に帰り支度を始めている。
僕の書く願い事には全く興味がない。
まあそうだろう。そんなことは分かっていた。

「書けました」

秋川先輩の恋愛がことごとく失敗しますように

「...おまえ、」
「僕の願いです」
「おまえなあ、」

笑いながらその短冊を取り上げようとするから、高く掲げた。
彼は華奢で小柄だけど、すばしっこいので油断はできない。

「七夕に人の不幸を願うな」
「先輩の不幸は僕の幸福です」
「おまえ、」
「恋愛してるんですか、」
「してないよ、」

手首を掴まれ、短冊を取り上げられそうになる。
反射的に掴み返し、強く拘束した。
驚くほど手首が細くはっとした。
至近距離で覗き込んだ彼の瞳。
眼鏡越しに光る虹彩。鶯色のひとみ。濃い睫毛。
鼓動が早くなる。彼に聞こえるだろうか。
胸が苦しい。

「その人、名前は？」
「...その人、って」
「幅跳びの人」
「それ聞いてどうすんの、」

僕の手から短冊を取り上げて得意気に笑う。
笑っている。
全然分かってない。
彼は僕のことを全然分かっていない。

少なくとも、あなたはいま笑っている場合ではない。

「返してください、」
「書き直すなら」
「書き直しません」
「性格悪いな」
「性格悪いんですよ、僕」

手のひらに収まってしまう肩を掴んで、力任せに掲示板に押しつけた。
ばん、と派手な音がして、背中を打ち付けた彼の表情が歪む。

セザンヌ～パリとプロヴァンス～国立新美術館
ダヴィンチの素顔「習作からモナリザまで」

彼が背にしたポスター。
大天使ガブリエルと聖マリアの受胎告知
七色の翼を持つガブリエルの指先が秋川の耳に触れている。

「性格悪いんですよ、僕...」
「...なんなの、これ」
「僕の願いです」
「おまえの願って、」

答えずに唇を重ねた。
薄く冷たい唇を舌先で舐める。
彼の手の中で、ぐしゃりと乾いた音がした。
次の瞬間、髪を掴まれひき剥がされた。
レンズ越しに潤む鶯色の瞳。
僕を見て言葉を失う。

思った通りだ。
そんな顔するのだろうと想像していた。
何度も。
何度も。
ずっと。
ここで、初めて会った時からずっと、想像していた。

僕の願いです、もう一度くりかえしたら声が震えた。

熟れすぎた柑橘類の匂いがする。

fin.